

## 県政アドバイザースタッフ会議 意見交換概要

### ■分科会①（活力ある鳥取の産業・雇用の創造）

（田中（憲）氏）

- ・表に出にくい分野である水産業だが、境港は取扱数量・金額において、全国でもトップレベル。付加価値を付けて観光と結びつけたり、マグロのように華々しく打ち出す等、水産業にはまだまだ将来性があるんだということを申し上げたい。

（田中（勝）氏）

- ・説明の中で「鳥取県農業生産1千億円達成プラン」の話があったので、「鳥取県水産業〇〇億円達成プラン」というものがあって然るべきだと思う。その辺りのお話をすべきではないか。

＜県回答＞

- ・平成24年から境港において高度衛生管理型市場整備を進めているところ。なぜ高度衛生管理型市場に取り組む必要があるのか、田中氏のお力を借りて、意識改革のための地元での講演会も実施。
- ・ハードだけではなく、将来どういった市場を目指すのかというビジョンもつくった。単純に1千億円といった数字ではないが、境港を全国に先駆けた、日本一魅力あふれる漁港にしていこうを合言葉に、活気がある、親しみやすい市場づくりを目指して整備している。

（原氏）

- ・NTTホールディングスが300億円のファンドを創設。発注から納品までの時間短縮等による鮮度改革や契約形態の見直し（圃場毎の年間保証）による産地改革などに取り組んでいるが、IJUターンなどの面では、やはり安定的な収入がないと人は戻ってこない。
- ・水産業においても課題やその解決策等について話し合う場をつくるなど、ファンド活用を考えてみてはどうか。
- ・玄米といい土づくりの野菜を中心とした食生活の取組においては、グループホームの要介護・要支援認定された方の改善・維持についても実証されている。
- ・米生産量の減少や地方財政の半分以上を医療費・介護費が占めるといった実態もあり、要支援の一手前の軽度認知障害（MCI）の方について、食を通してどれだけ防げるのか。

（田中（勝）氏）

- ・観光にインバウンド・アウトバウンドがあるように、水産にもイン・アウトがあり、つまり魚を「産み育てる」とことと「どう消費するか」といった観点が重要。このアウトの部分において、大消費地でどう消費させるか、どう応援していく仕組みがあるかといった議論が必要である。
- ・境港と言えば「観光」もあるため、水産と観光との融合といった観点も重要。課題解決のためには、目的を挙げて、どう解決していくのか方向性を打ち出すことが必要なので、「水産と観光との融合」を総合戦略のテーマに挙げて顕在化させるべきである。

＜県回答＞

- ・先ほどお話した新しい市場の目指す姿のひとつ「親しみやすい」の中に、観光拠点といった観点もある。高度衛生であるため一般の人が市場に入ることはできないが、2階に見学のための通路を設け、クルーズや韓国、中国などの外国人観光客にも分かるような案内看板の整備も予定しており、単に水産ということだけでなく、観光と連携した取組も進めているところ。

（宮原氏）

- ・介護の現場において、子育てと仕事の両立が困難なことから途中で辞めてしまう方が増えてきており、人材不足が問題になっている。何とか工夫して、仕事を続けられる人が増えて欲しい。
- ・最重要課題である雇用問題を考えた時、生活の安定が重要であり、例えば和牛などブランド価値のあるものを高く売り、生活に耐えうる高い賃金がもらえれば生活が成り立つ。安さで勝負しても中国に負ける。

（田中（勝）氏）

- ・鳥取県には他県に対して十分その優秀さをPRできる企業がある。県として、そういった企業をもっともって首都圏に対してPRしないといけない。
- ・マスコミをどう利用するのが重要。これまでの広報ではなく、広報戦略という考え方をもち、東京が市場だと認識するところから、いろんなことがスタートする。
- ・企業は放っておいても生き残っていくので、それらを県庁としてどう活かしていくのか。全部応援する訳にはいけないので、トップランナーだけを応援していく。県民から集めた税金をどう有効活用するのか、そんなセンスを持って県庁職員には働いてもらいたい。

（足立氏）

- ・大学時代、経済学部で最初に学んだのが限界効用逓減の法則（効果が徐々に減っていくこと）、合成の誤謬（正しいことの積み重ねが間違った結果を招く）だった。
- ・鳥取県は、新聞を見れば分かるが、毎日いいことをしている。しかし、所得は10年間減りっぱなし。経済も政治も最終的には経世済民。民のレベルをどれだけ上げるかが問題である。島根県にとくに逆転されている。

- ・県民所得が10年間減り続けているということは、何かが間違っている。表面的なものではなく、抜本的な対策が必要。戦術は立派だが、基礎的な産業構造など戦略が足りない。
- ・県発注工事が安いため、大手がほとんど落札する現状。そのため県内中小企業の多くがつぶれ、何が起こったかという、大雪が降っても雪かきする業者がいない。
- ・以前、地元商工会議所等から美保基地の防衛施設長に対し、大手が落札しても、下請けは地元業者を使ってもらおうよう要望した結果、国のお金が地元に戻るようになった。

(田中(勝)氏)

- ・総合戦略の一丁目一番地に「県民所得のアップ」がない。一丁目一番地が何かというこいとを忘れて仕事をして、空回りになるだけである。

(原氏)

- ・以前、鹿児島県の銀行が様々な産業の経済波及効果を計算。融資の際、例えば耕種農業と養豚を比較し、養豚業者の方が効果が高いとして傾斜融資を行った。
- ・また、付加価値を高める加工業にも着目。これは、例えば大島紬であれば1万円、これが友禅染になると300万円に跳ね上がる、といった産業連関倍率（財・サービスの「購入→生産→販売」という連鎖的なつながりを表したもの）の考え方。
- ・結果、一次産業の県民総生産を食品加工業が追い抜いた。これは、先ほど来の県民所得やI J Uターンの話にも関連するもの。

(足立氏)

- ・住みよいところとして鳥取県は全国上位にランクインしているが、先ほどの県民所得で言えば、鳥取は東京の半分である。住みよいのランキングを見て、県政はうまくいっているなどと自己満足してはダメだと思う。
- ・18%～20%の子どもの授業料が払えていないといった現実がある。一度調べてみたらいい。

(原氏)

- ・総合戦略の考え方について、県民所得を分解して、例えば観光や子育て、水産などの施策において、これだけ投資すると県民所得がこれだけ上がるといった数値化ができれば、何が効果的なのか、どこに税金を配分すべきなのか、みんなが分かるようになるのではないか。

(田中(勝)氏)

- ・大学卒を採用するのではなく、一度東京に出てから10年後、30代前半くらいの人に鳥取に戻ってきてもらおうと非常にいい仕事をする。大学卒業後、いきなりすぐ戻すような不自然なところに力を注ぐ必要はない。

<県回答>

- ・県は、お話されたような類似の取組で、昨年度、「リップとっとり」という事業を県内のIT系企業と一緒に試行的に行った。
- ・都内で5～10年働いた方で、都内のあくせくした働き方に少し疲れたなという方に対して、鳥取のゆったりとした環境で働きませんかといった投げかけを行ったが、結果的には芳しくなかった。
- ・とりガスさんは、都内でバリバリと働いている人をどうやって呼び戻されているのか。

(田中(勝)氏)

- ・そういう人材は、県の施策として成り立つかどうかは別として、一本釣りの方法しかないと思う。

(足立氏)

- ・学校給食は一日何食ぐらい出るのか？コストの問題もあって、結構、輸入野菜が使われていると聞く。どうでも毎日食べられるものなので、ここに対する対策も効果が期待できるのではないか。

<県回答>

- ・学校給食の7割くらいが県産品。

## ■分科会②（未来を担う人づくり）

(福井氏)

- ・未婚や出生率の問題については、早く結婚して出産するのは個人の状況もあるので、なかなか難しいのが現実。
- ・鳥取県が誇る人材について、最近のタクシー運転手は説明できるようになっている。これはすごい進歩だと思っている。地元の人がそういうプライドを持ってくれたら地域ももっとよくなる。
- ・偉大な先輩が地元から出ているということを知らない人が多い。知っていたら、地元に対する見え方がもっと違うと思う。自分も鳥取県は何もないところだと思って育った。外に出て初めて、凄いと知った。地元の方ほど地元を知らない。いま県はふるさと教育に力を入れて取り組んでいるので、方向性としては間違っていないと思う。
- ・今月25日、琴浦町で全国に広がる大人の学びである「熱中小学校」が開校する。民間主体で地域を盛り上げようとする取組であり、県も応援するなど、人材を育てる体制を意識してほしいと思う。

(南部氏)

- ・ふるさと教育の取組を拝見したが、ちょっと違うんじゃないかというのが素直な感想。例えば、砂丘探究において、世界に先駆けた取組である鳥取大学の乾燥地研究センターなど、きちんと副読本などにより児童生徒に教えているのか。少なくとも自分の近隣には乾地研のことを知っている人はいない。

- ・倉吉の淀屋をはじめ、琴浦の船上山や神崎神社、菊港など、自分も大人になってから初めて知った。いまのふるさと教育の取組には、こういう由緒ある鳥取県を児童生徒に知ってもらおうという姿勢が感じられないので非常に残念に思う。
- ・湯布院では、幼稚園幼児を馬車に乗せて市内を巡ってまちの様子を見てもらい、小学校では副読本で本多静六の助言、尽力により湯布院のまちづくりが進められたことを紹介するなど、取組につながりがある。このつながりが重要である。
- ・是非、分かりやすい試み、つながりのある試みに取り組んでいただきたい。
- ・鳥取県の女性就業率は高いが、管理職までなるんだという上昇志向など、女性の気力・気迫はどんなものかということと併せて、その現実はどうか。結婚や子育て対策など人を増やす取組も大事だが、いまある女性の力を120%活かす方法も考えないといけないのではないか。

＜県回答＞

- ・いわゆるM字カーブと言われ、出産後も引き続き働ける環境が整っていることを示すものだが、鳥取県はこの環境が全国1位。また、管理的職業従事者の女性比率も全国上位にあるなど女性の登用は進んでいる一方、子育て等の理由から管理職的なポストに就きたくないといった方もいる。
- ・しかし、女性ならではの感性、女性でないとできないこともあるので、組織を動かす管理職には、男性と同様、やはり女性も同じような立場で関わっていくことが重要だと思う。
- ・子育てとセットで女性活躍も推進していくというのが、いまの鳥取県のスタンス。

(南部氏)

- ・子育てと仕事の両立をサポートするような環境であったり、子育てがある程度落ち着いた後、上昇志向もなく、このままの状況でいいと思っていた人が、もう一步、自分にチャレンジできるような制度が必要ではないか。

＜県回答＞

- ・鳥取県の3世代同居率は全国に比べて高く、県としても親世代の子育て参画を推進しており、親世代に向けた子育て講座のほか、女性に特化した起業サポートにも取り組んでいる。

(福井氏)

- ・活躍している俳優でもスポーツ選手でもいいのだが、あの人は鳥取県出身だよ、といった情報を子どもたちに届けているか。サッカーで言えば米子北高出身の昌子選手など、そういった身近な人の話を伝えられれば、子どもたちも夢を持ちやすいのではないか。

(南部氏)

- ・多分、家でそういった会話がされていないのでは？こういった親の姿勢が一番の問題ではないか。

＜県回答＞

- ・全国学力・学習状況調査の結果において、小学校6年生の子どもたちが「将来の夢や目標を持っている」と回答した割合は、全国85.1%に対して、鳥取県は81.5%といった状況で、約2割の子どもたちが夢や希望を持っていない。
- ・これは子どもの問題ではなく、実は大人の問題ではないのかと感じている。学校現場だけではなく、家も含めて、地元の大人たちが夢や目標を子どもの前で語っていないのではないかと思います。

(福井氏)

- ・子どもの頃に感じたのは、全国区との距離感。鳥取は、なんてど田舎なんだと。
- ・伯耆には山上憶良、因幡には大伴家持が国司として赴任していたことを、学校の先生は教えてくれない。多くの大人も知らないと思う。
- ・自分は大人になってから、憶良や家持を知って、当時、鳥取は都に近かったんだと驚いた。
- ・そういった意味でも、親も子どもと一緒に鳥取のことを学ぶべきだと思う。

＜県回答＞

- ・国語の教員が、憶良や家持のことを知らないということはないはず。それにどう価値づけしていたか、先生のアピール力というか、子どもたちにどうやって話をしているかだと思う。

(南部氏)

- ・地域の誇れる歴史文化の話も含め、お父さんお母さんが、家で、自分の仕事の話子どもたちにしていくのだろうか。仕事はつらいこともいっぱいあるけど面白いんだよ、これだけ世の中の役に立っているんだよ、といったことをきちんと伝えているのか。
- ・人の役に立つということは人間にとって根源的に必要なこと。仕事はしんどいこともいっぱいあるが、人様の役に立つこと、感謝されることに最高の幸せがあるのだと思う。
- ・こういったことが根本的に家で教えられていない状況では、子どもたちも何を目標に生きていけばいいのか分からないはず。将来の夢や目標を持てていないのは、こういった背景があるのではないかと。

＜県回答＞

- ・全国学力・学習状況調査の結果において、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」といった設問では鳥取県の子どもたちは全国平均より15%以上高い回答率である一方、「地域や社会で起こっている問題や出来事に興味がありますか」では全国平均より－1.7ポイント、さらに「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」全国平均より－3.4ポイントといった現状で、みんな行事には参加するが、残念ながら主体性があまり感じられないような状況にある。

- ・以前、鳥取青年会議所の取組で、年配の方が子ども達に国府の歴史を教えて、それを子ども達がボランティアガイドとして観光客に対して案内するといったことを2年間ほど行っていた。
- ・子ども達は、先ほどの役立ち感といった話にあったように、すごく一生懸命勉強してガイドをすることで大人から褒めてもらえる、なおかつ自分の住んでいる地域にこんな歴史があるんだということを知ることができる。

(南部氏)

- ・キャノンの人事考課の取組事例から、自社でも「半期の取組の中で自分を褒められるところはどこですか」といった設問を設けたところ、こんな工夫によりこういった成果につながった等々、意気揚々と語るなど社員がすごくいきいきしてきた。こういったポジティブな部分をどう認めるかという仕掛けも大事だと思う。

(岡田氏)

- ・非常に価値観が多様化してきた中で、親が子どもに対して示すことができる価値観とは何なのか、反対に子ども達が希望するものは何なのか等、この辺りにミスマッチが起きて、へたに口を出せないし、非常に難しい世の中になったものだと思う。

(福井氏)

- ・県が、例えば国府町の子ども達のガイドの取組の番組をつくり、それを県内のケーブルテレビで放送してもらうなど、他の地域で行われているいい取組を紹介するようなことはできないものか。
- ・どんなビジネスでも言えることだが、「どうやって伝えるか」がポイント。国府の取組を県内のケーブルテレビで伝えることで、例えば南部町や伯耆町の人がうちは「たたら製鉄」をやろうとか、そんな話につながるんじゃないか。
- ・関金のこども歌舞伎を見て、千葉の館山でもこどもの歌舞伎が始まっている。

(福井氏)

- ・鳥取は食べ物もうまいし、温泉もあるので、「未老のまち」づくりを推進すればいいのではないか。
- ・鳥取のストロングポイントである自然、食べ物や温泉を活かし、全方位的にするのではなく、テーマを「未老のまち」に絞って、全国に先駆けて打ち出してみてはどうか。これ3〜4年前にも提言したんだが、関係人口の増加のためにも、若者定住だけでなく、高齢者を呼び込めばいい。
- ・全国に2か所、猫のお薬師さんがあるが、ふたつとも鳥取県にある。ひとつは湖山池の猫島。もうひとつは西倉吉にあって、猫の形をした仏像がある。迷子猫が帰ってきたり、ペットの病気が治ったり、結構な信仰があった。こういったコンテンツを活かせばいいのだが、なかなか地元の人が動かない。

(南部氏)

- ・「未老」の話で、体にいいものを食べて、いつまでも健やかに暮らすことも素晴らしいが、いつまでも頭を動かすも重要。役立ち感の話にもつながるが、年配の方に培った知識を子ども達に伝えるという役割が与えられれば、お年寄りも子どもも両者がいきいきする、うまいつながりができはしないか。

<県回答>

- ・いま全国的に、学校と地域・家庭をつなぐコミュニティスクールという取組が広がっている。
- ・地域の人材をいかに学校に取り込むか、いかに活用できるかといった観点での取組が増えている。

(南部氏)

- ・以前、「観光甲子園」を立ち上げた。智頭農林が優勝して話題になったが、地域の観光資源を掘り起こして、それら観光資源をつなげて観光メニューを提案する訳だが、掘り起しの際、地元のいろんな人から話を聞いて、地域資源の再発見につながっている。これは高校生の取組だが、中学校のエリア、単位に落とし込んで取り組んでみるのも面白いのではないか。

## ■全体会

(福井氏)

- ・何年前に「未老」ということを提言した。
- ・鳥取は魚をはじめ、食べ物がうまい、水や空気もいいし、温泉もあるなど、鳥取はなんてすごいんだと思うが、それらが活用できていない。普通の観光の土俵で戦おうとするから負ける。もう少しターゲットを絞って取り組むべきである。
- ・2024年には、65歳以上の方の5人に1人が認知になると言われている中、去年、NHKのBS放送でも特集されたが、ある柑橘系の植物により約8割の方の認知の症状が改善されたといった事例がある。
- ・鳥取は医療発祥の地でもある。こういった情報にいち早く反応して、休耕地で栽培し、食事や温泉で活用するなど、「鳥取に行く」と認知にならない」などといったイメージ戦略を打ち出すことをしてはどうか。

(南部氏)

- ・観光の現場では、AIに頼れるような世界ではない。料理を作るにしても、いろんなサービスの提供にしても、絶対、人間が必要。
- ・人手不足が叫ばれる中、自分が社外取締役をしている「モロゾフ」において、再就職の年齢を徐々に上げて、以前は40歳までだったものを、このたび65歳まで引き上げた。
- ・60歳から64歳までで働いている人は半分しかない。逆に、まだ50%は働ける方がいる。人材確保の面でも、こういった元気のある方を、もう1回ブラッシュアップして、社会に出てきてもらうような取組も必要ではないか。